

[特別企画]

いま、小林多喜二を読むこと

2008年は小林多喜二生誕105年、没後75年を迎える。75年を経た日本の社会はどのように進化、変革を遂げたのだろうか？
連日報道される国民を守る者たちの不正、そして格差社会、幸せになることを許さない社会。もう一度、多喜二と共に人間のありようを考えたいものだ。



たてまつわへい
1947年栃木県栃木県生まれ。
早稲田大学政経学部卒業。80年「遠雷」で野間文芸新人賞、97年「毒一風聞・田中正造」で毎日出版文化賞受賞。行動派作家として知られ、近年は自然環境保護問題にも積極的に取り組む。

新しい視点をくれた
多喜二文学

北海道帯広北高校教頭(国語科)
橋爪恒雄

多喜二の読書が
新たな文学運動を

秋田県美郷町立千屋小学校教頭
高橋宗生

現代の「蟹工船」
を再現する社会

東京明治学院高校副校長(社会科)
東京大学非常勤講師
小暮修也

『蟹工船』の
現代的な意味

神奈川県立津久井浜高校教諭(国語科)
三上晴夫

「労働観」を厳しく問われる場面が増えている。豊かな社会の裏返しか、拝金主義に対する抵抗か、「金銭ではなく自己実現を」と解釈する向きもある。教育現場からの切なる願いとして「自己の社会的存在理由」について深く考察してほしい。若者あての「労働」に対する社会の発議もあまいだ。日本は本当に豊かか悩む場面が増えてきた。小林多喜二を読むことは大いなる刺激になるはずである。そして社会というものを判断する新しい視点を提供してくれる。いまこそ小林多喜二の文学が輝くときである。

作家の三浦綾子は、小林多喜二の母を描いた小説『母』の動機に「多喜二の死の惨さと、キリストの死の惨さに、共通の悲しみがあふること」をあげている。いづれも権力によって惨たらし死を与えられたが、多喜二は人間の自由の尊さを、キリストは人間の罪の贖いを示してくれた。二世紀に入ったが、働いても豊かにならないワーキングプアと格差社会の時代となり、現代の「蟹工船」が再現している。多喜二が生涯を通して訴えた人間として生きられる社会の実現と人権の確立を私たちも目指してゆきたい。

「蟹工船」再読

立松和平(小説家)

大学生の時代に読んだ「蟹工船」は、むしろ遠い時代の出来事を感じたものだ。そのようなことはあつたかもしれないのだが、私の生きていた時代からは遙かに隔っているのだと思えたのだ。それから四十年もたち、改めて読んでみると、この作品に描かれている臭気が臭い立つような瘴癘な光景が、むしろあまりに近いようにも感じられてきた。現実の皮膜を一枚隔てたわずかな向こう側、その膜を破りさえすれば手を伸ばして届くところにある現実とも思えるのだ。

は、少しでもよい暮らしを家族たちにさせるためだ。そんなささやかな幸福を求めているだけで、天下国家のことを考えているわけではない。それなのに効率を求め、結局自分たちの利益しか考えない監督や雑夫長に、実際は姿の見えない資本家に、死の瀬戸際まで追い詰められ、実際に何人かが殺される。あからさまな暴力ではないかもしれないのだが、本質は暴力としてなら変わらない管理機構が、今の時代にもしつかりと存在する。社会の効率にそぐわなければ、私たちはたちまち社会の底辺に落とされるのではないか。それが恐ろしいから、みんな無理してこんなに一生懸命働いている。若い時には見えなかった現実が、結局変わらぬ私たちに社会には存在することがわかってき

た。考えようによっては、「蟹工船」よりもっと苛酷になったともいえる。雑夫や漁夫や水夫や火夫は団結し、敵に向かっていた。そこには希望さえも感じることができた。その希望の上に、小林多喜二は文学の行為をすることができたのだ。私たちの時代を冷静に見詰めると、効率が雑夫や漁夫や水夫や火夫の一人一人の間に持ち込まれ、それぞれが苛酷な競争をしなければならなくなっているのではないか。敵はまず隣りにいる同僚で、隣りの敵に打ち勝たなければならぬ。競争社会はそこまですななり、一致団結して敵に向かうなど夢のようなことになっていく。そもそも本物の敵が存在するかどうかどうかわからなくなっている。

* * *